

## 尾上木見津遺跡（第2地点）・駒詰遺跡（第2地点）

－「奈野」って何なの？－

調査課長 阿部 寿彦

### 遺跡の立地と周辺の遺跡

遺跡は高崎川中流域の右岸、標高35mの台地先端部に立地する。ほぼ中央を南北に近世内野牧の野馬土手が縦断し、富里市と酒々井町の行政界にあたる。西側は尾上木見津遺跡、東側は駒詰遺跡である。

高崎川流域における主要な遺跡を概観すると、南側の対岸には整然と並ぶ掘立柱建物群と、炭化米や「三倉」墨書土器が出土し、収税した穀物の貯蔵用の倉の存在から郡よりも下位の役所跡と推測されている飯積原山遺跡(1)が所在する。約4km下流には8世紀前半の創建である長熊廃寺(高岡寺)(2)及び、奈良・平安時代の掘立柱建物群が規則的に配置された高岡大山遺跡(3)が所在する。約4km上流では8世紀末の須恵器窯跡である吉川窯跡(4)が所在する。また、約2km上流では、四面廂付掘立柱建物跡や和同開珎が出土した塚越遺跡(5)などが所在する。

### 遺跡の概要

発掘調査は、平成21年8月から平成22年3月にかけて実施した。その結果、縄文時代の土坑36基、古墳3基、古墳時代中期竪穴住居跡14軒、掘立柱建物跡1棟、土坑50基、奈良・平安時代竪穴住居跡28軒、掘立柱建物跡10棟、土坑13基、土坑墓17基、近世溝状遺構4条、炭窯2基、土坑16基、野馬土手とそれに伴う溝1条が検出された（遺構数は二遺跡合計したもの）。

### 古墳

古墳は3基検出された。盛土が遺存していたものは1号墳（駒詰遺跡）のみで、他は周溝のみの検出である。1号墳は径約25mの円墳で、周溝は上幅5m前後で西側の一部で途切れて陸橋状を呈する。盛土の厚みは約120cmである。中央部を近世の野馬土手に、墳頂部は平安時代の土坑墓に破壊されていた

ため遺存状況は悪く、主体部は検出されなかった。確実に古墳に伴う出土遺物もなく、造営年代は不明である。形態や遺跡内における遺構の分布状況などから、中期を中心とする時期ととらえておきたい。

### 古墳時代中期の集落

竪穴住居跡は14軒検出された。6号住（駒詰遺跡）からは、壺・鉢などに限定された器種の土師器が、壁面沿いの床面から完形で多数出土している。また、1号住（駒詰遺跡）のピットからは、高杯や壺がまとまって出土している。総じて甕などの煮沸具の出土が少なく、壺・椀・高杯などの供献用の器種が多い極端な出土傾向を示している。

### 奈良・平安時代の集落

#### ①奈良三彩（二彩）椀

奈良・平安時代の竪穴住居跡は28軒検出され、8世紀末～9世紀前半という比較的限定された時期に営まれた集落であった。そのうち2号住（尾上木見津遺跡）から、奈良三彩（二彩）の椀が出土した。完形のを故意に半分切断し、破片を重ねて置いたような出土状況を示し、何らかの儀礼的な行為が窺われる。また、口唇部の一部を打ち欠いており、内面にはノミ状の工具痕が観察される。住居内からは別に三彩の小壺の小破片や椀の口縁部片などが数点出土している。他の出土遺物は9世紀前半頃のもものが主体であり、二彩椀とは年代に開きがある。また、この住居からは、覆土最上面で鉄製鋤先が立った状態で出土したほか、絹雲母片岩の破片が床面に散乱するなど、この住居で特殊な祭祀が行われていたことが推測される。また、近接する14号住（尾上木見津遺跡）から皇朝十二銭の「神功開寶」（初铸765年）の出土もみている。

## ②掘立柱建物跡

調査区東側中央付近の台地縁辺部で10棟の掘立柱建物跡が検出された。ほぼ南北方向に主軸を揃えて4棟が同時併存したような配置を示し、3回程度の建替えが行われている。北側の建物は桁行3間×梁間2間、その南に位置する建物は本遺跡の中心的な建物で、大型の柱掘形と10cm以上の幅をもつ柱痕跡が確認されている。重複関係は本格的な整理作業を経てからになるが、概ね桁行5間×梁間3間の建物で、3回以上の建替えを経て、ある時期には2面の廂の付く建物と推測される。南側の2棟は市道により削平されているため建物規模は明らかではないが、桁行4間程度の建物が2棟もしくは3棟並列するものと考えられる。

## ③土坑墓

調査区南側の台地先端部側を中心に17基検出された。掘形の形状により二分でき、短軸方向でオーバーハングして横方向に掘り込まれるいわゆる「有天井土坑」と、垂直に掘り込まれるものの二種類である。底面に溝を穿つか否か、有天井土坑でも遺体を安置する場所と考えられる最奥部が最も深い位置になるか高い位置になるか、底面の溝がどの位置に掘り込まれるか、など形態はバラエティーに富んでいる。出土遺物はほとんどないため、土坑墓の営まれた細かな年代は不明であるが、分布状況などから概ね集落の形成時期と並行するものと考えられる。

## ④墨書土器「奈野」

奈良・平安時代の竪穴住居跡から出土した土師器杯には、「奈野」という墨書が施されたものが多い。二文字記載されるもの、「奈」ないし「野」の一文字のみ記載されるものという違いはあるが、ほぼこの文字だけで全体の墨書のうちの大半を占めているものと予測される。この文字は隣接する新橋高松遺跡(6)や寺沢遺跡(7)のみで確認され、付近の台地全域に集中して分布する特徴的なものと考えられる。

### まとめ

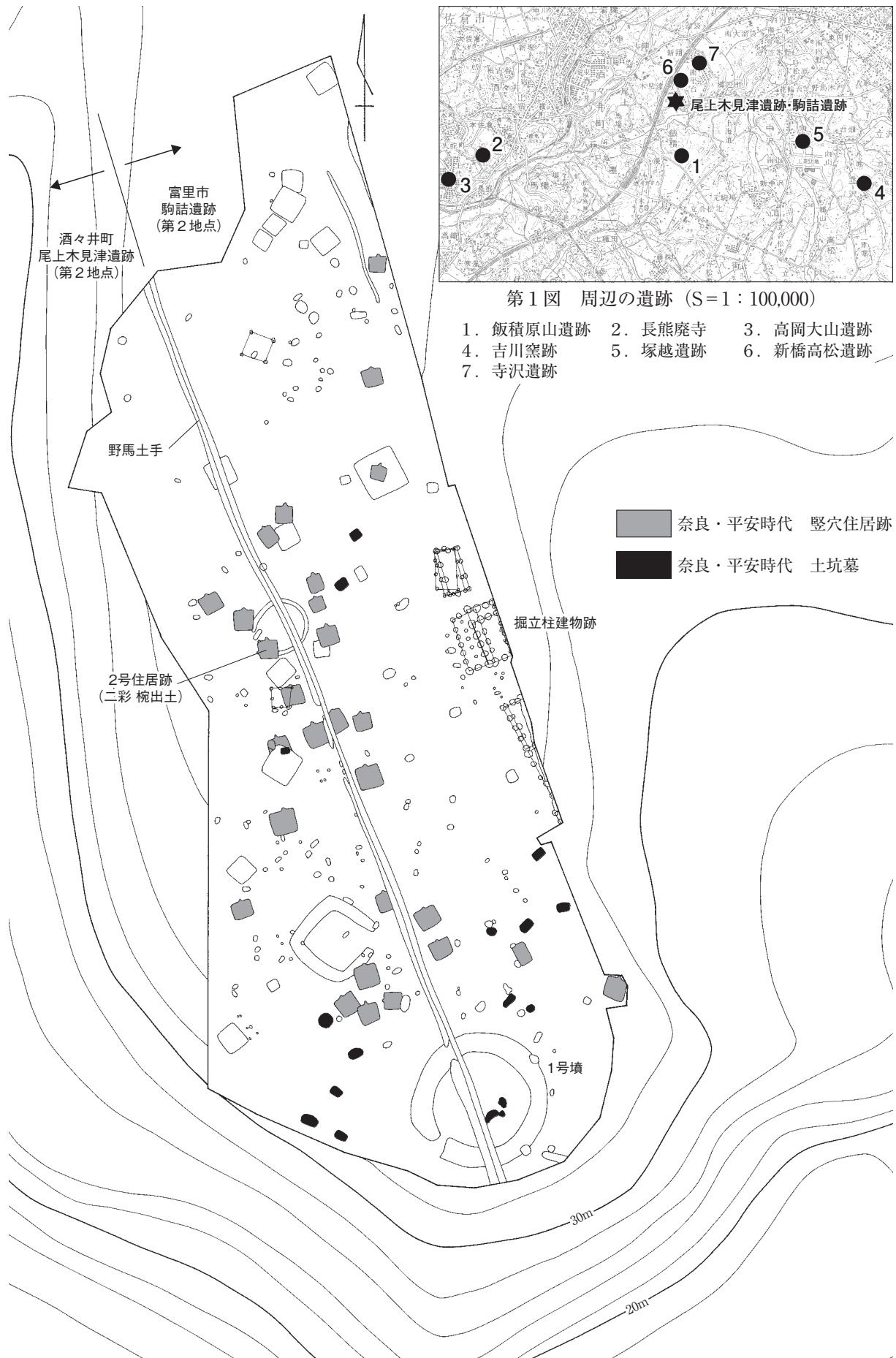
古墳時代中期の集落は本遺跡の北側及び東側で現在継続的に調査している地点でも竪穴住居跡が検出されている。分布状況からみて、集落の形成は西側

の谷を意識して行われ、台地の基部側は居住域、先端部に墓域という占地形態が窺える。次にこの台地の上で土地利用が行われるのは8世紀後半を過ぎてからであり、かなり長期に亘って集落としての断絶期間が存在する。祖先の墳墓として神聖視されるべき古墳の墳頂部に古代の土坑墓が掘り込まれていることからみても、まったく系譜の異なる集団によって形成された集落であるといえよう。

奈良・平安時代の特筆すべき成果としては、二彩碗の出土があげられる。奈良三彩のうち二彩で、しかも碗という器種に限れば、国内で完形の製品は正倉院御物にしか認められない。遺跡出土品には、興福寺や西大寺などの奈良の大寺院や平城京内などで若干の例があるが、完形のは国内初例と思われる。奈良三彩の集落遺跡からの出土例は、小壺や托などの祭祀用具としての出土が主体を占める。一方、碗を含む大型の器種は寺院などから佛具として出土するのが通例で、平城京域の大寺院を中心に地方でも古代寺院跡などからの出土が主体である。本遺跡の二彩碗出土の背景に言及してまとめに代えたい。

まず、遺構配置からみた集落の景観として、台地東側の縁辺部に大型の掘立柱建物を南北に一直線に配置し、その周りには一定間隔の空地を設けて竪穴住居が囲む、というきわめて視覚的に明瞭な占地形態を示している。これはいわゆる「村落寺院」の景観にも通ずるもので、掘立柱建物群を「仏堂」とする解釈も成り立つであろう。

しかし、二彩碗の入手経路を考えると、さきにあげたような南都大寺院との直接的な結びつきが不可欠と考えられること、近接する飯積原山遺跡では「三倉」墨書や稲・穀物の収蔵倉庫と考えられる建物群が検出されていること、さらには「～野」という墨書表記は通常地名を指していることが多く、本遺跡の「奈」については直接「奈良」を示すものと解釈した場合、集落の形成時期である8世紀末～9世紀前半という時代背景も含め、初期荘園、とくに南都大寺院との関わりのなかで成立した荘園に関わる遺跡、という可能性を仮説のひとつとして提示し、今後の整理作業を通して検証していきたい。



第2図 遺構検出状況図 (S=1:1,000)



1号墳（駒詰遺跡）



6号住（駒詰遺跡）



1号住（駒詰遺跡）遺物出土状況



二彩 椀



二彩 椀 出土状況



掘立柱建物跡（駒詰遺跡）



土坑墓（有天井土坑）



墨書土器 「奈野」